

赤十字 NEWS

NOVEMBER 2017
NO.930 11

平成29年11月1日(毎月1日発行)
赤十字新聞 第930号
昭和24年9月30日 第三種郵便物認可

命を見つめて

バングラデシュ南部避難民支援の現場から

<http://www.jrc.or.jp>

CONTENTS

FEATURE_2・3

バングラデシュ南部避難民支援
カメラがとらえた
まなざし

TOPICS_4・5

連盟事務総長が特別講演
“苦しんでいる人を救いたい”
という思いが国境を越えるとき

若者にこそ届けたい
“たすけあい”の精神
グローバルフェスタで
ユースボランティアが活躍

「伝える」ことから始まる
核兵器廃絶への取り組み
広島に被爆者がトルコ赤新月社の
招聘で講演

皇后陛下のおこころが伝わる
手拭いのお見舞い
62回目を迎えた「御下賜の手拭い」

Column

[とっさのとき、どうする?]
切り傷の止血法

AREA NEWS_6・7

北海道/栃木/群馬/石川/静岡/滋賀
/近畿ブロック/大阪/山口/大分

Column

[健康豆知識]
ハウスダストアレルギー

WORLD NEWS_8

年間献血者、5人から3万6408人へ!
“献血”という概念のない国での成功
ラオス血液事業の歩み



赤十字新聞 編集・発行/日本赤十字社 広報室
〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3
TEL: 03-3438-1311
一部20円
赤十字新聞の購読料は会費に含まれています。



着の身着のままバングラデシュに避難した少女たち。おなかを空かせ、雨でぬかるんだ道を配給を受け取りに向かう
© Michael Drost-Hansen / IFRC

8月25日以降、同じアジアの中で、たくさんの人々が
住むところや食べるものを失い、
生命をも危ぶまれる人道の危機に瀕しています。
赤十字運動の原則は、
いかなる状況下においても差別なく、人々の苦痛を予防・軽減し、
いのちと健康を守り、人間の尊重を確保する「人道」を旨とします。
世界の難民・避難民などの数は現在、
第二次世界大戦後最多となる6600万人。
日赤をはじめ、各国の赤十字・赤新月社が連帯し、
世界各地で今日を、そして明日を生き抜くために
救いを必要としている人々への支援に総力を挙げています。



人間を救うのは、人間だ。

 日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

支援物資に向けられる無数の目



列をなす人々の鋭い視線の先には、配給の物資。すし詰めの状況にありながら、辛抱強く配給の順番を待つ

家族を失った人も多い



2歳半の息子を連れ、12日間かけてキャンプにたどりついた。口にしたのは泥水のみ。避難途中で夫も亡くした

ひしめき合うシェルター



ハキムバラには約5万1千人の避難民(10月4日現在)が、住みづらい斜面にシェルターを建てて暮らす

自作の「我が家」



雨の中、竹とターボリン(タール加工したシート)で自らシェルターを建てる

ミャンマーからの避難民が60万人以上も流入しているバングラデシュ南部(10月21日現在)。現地に入った日本赤十字社スタッフは、キャンプに暮らす多くの避難民の過酷な現状を見据える厳しい「まなざし」に圧倒されました。日赤スタッフも避難民一人一人の命に熱い「まなざし」を向け、支援活動を続けています。

バングラデシュ 南部 避難民 支援

カメラがとらえたまなざし

2017年8月25日以来、ミャンマーのラカイン州では暴力行為が相次ぎ、同州に暮らす60万人以上の人々(妊婦を含む女性、子ども、高齢者がその6割を占める)が、隣国バングラデシュ南部のコックスバザール県に逃れています(10月21日現在)。酷暑の中、水も食料もないまま徒歩で国境を越える避難民も多く、人々は疲弊しきっています。バングラデシュは、既にモンスーンによる豪雨で大きな被害を受けており、避難民の急増で安全な水がさらに不足し衛生環境も著しく悪化。水、食料、住居、公衆衛生に医療サービスの提供、また恐怖や悲しみ、将来への不安からこころのケアが急務です。

そこで、バングラデシュでは現地赤新月社、赤十字国際委員会(ICRC)、国際赤十字・赤新月社

連盟(連盟)、そして日本赤十字社を含む27カ国の赤十字・赤新月社が、避難民の保護、物資配給、医療支援などを行っています。避難民の急増による人道危機の高まりを受け、日赤は先遣隊の緊急派遣に続き、1千万円の資金援助と、基礎保健ERU(緊急対応ユニット)の派遣を決定。9月22日には第1班10人、後にこころのケアに当たる看護師が1人現地に出発しました。現在、ハキムバラにて香港赤十字とデンマーク赤十字社のメンバーを含んだ国際チームを編成して巡回診療を展開。地元の保健局、現地赤新月社と連携しながら、活動を行っています。さらにERU第2班を10月20日～11月30日、第3班を11月23日～1月にかけて派遣し、計4カ月間にわたって活動する予定です。

診療所は避難民のよりどころ



意識混濁で運び込まれた男性の状態を即座に確認する日赤の安部香織看護士。暑さと水不足から脱水症状も多い

避難民の協力を得て診療所を開設



診療所開設のため調査する河合謙佑管理栄養士リーダー、喜田たろうチームリーダー、吉米地則子看護士長(左から)

大切な支援物資は厳しく管理



衛生キット、毛布などの支援物資が一時保管されている倉庫。ここから必要としている人々の元へ届けられる

箱の重さは支援者の心の重み



配給所で、重い箱を受け取った少年は、まっすぐ前を見て家路を急ぐ

新しい命の誕生は希望の光



丁野美智助産師と現地の助産師の手で取り上げられたハシナちゃん。18歳・初産の母と共に健康

季節は高温多湿の雨期 劣悪な衛生環境



雨が降ると道はぬかるみ、トイレ不足により汚物があふれ出す。それでも少年たちは食べるためにマキ集めに励む

看護師の笑顔も治療の一部

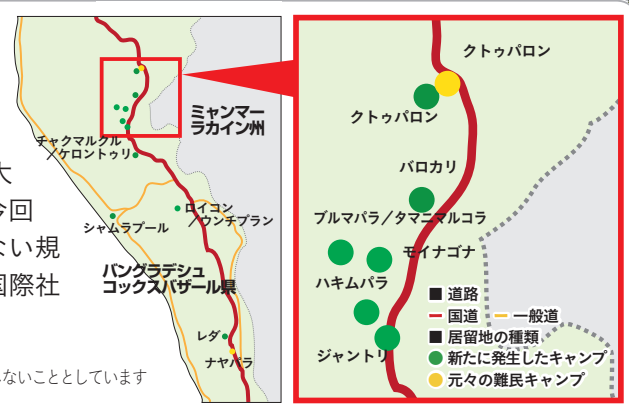


発熱し激しく泣く乳児を連れて、診療所を不安げに訪れた母親。診察後、目を合わせて丁寧に薬を手渡され、ようやく安堵(あんど)の表情

バングラデシュ南部避難民の背景

ミャンマーには多くの少数民族が暮らしていますが、今回バングラデシュ南部に避難したラカイン州に暮らす一部の人々には国籍が認められていません。移動の自由を制限されるなどさまざまな厳しい制約の中で暮らし、適切な生活

水準を維持できない状況にあります。国内が混乱した際には過去にも何度か、他国への大量流出が発生していますが、今回はその避難民の数から前例のない規模の人道危機とされ、改めて国際社会の注目を集めています。



家を焼き払われ移動してきた避難民の女性たち。右の女性は生後14日の娘を抱いている



脱水と栄養不足で運ばれてきた少年。赤井智子助産師に見守られ、点滴とクッキーで元気を取り戻す 「こころのケア」に従事する津田香都看護士。お遊戯などでストレスから解放された子どもたちに笑顔が戻った

8月25日から10月21日までの58日間で赤十字がバングラデシュで行った支援

食料を届けた総人数: 25万4180人	配布した食料: 531.8トン	衛生キットを配布された人数: 9万4065人
配給した安全な水: 7万4620リットル	支援したシェルター: 1万6500家族	衛生指導を届けた人: 7094人
医療診療した人数: 9486人	配布した毛布: 2万1260枚	命に関わることを優先に支援が届けられていますが、まだ十分ではありません。皆さまに救援金のご協力をお願いいたします。詳細はP7へ。

TOPICS

連盟事務総長が特別講演

“苦しんでいる人を救いたい”
という思いが国境を越えるとき

2017年10月2日 於:明治学院大学 白金キャンパス

来日した国際赤十字・赤新月社連盟(以下、連盟)のエルハジ・アマドゥ・シィ事務総長による講演会が行われました。会場は、“Do for Others(他者への貢献)”を教育理念に掲げる明治学院大学。日赤と同大学は、赤十字思想の誕生と大学の創設が共に150周年を迎えた2013年、ボランティア育成に向けて協力し合うパートナーシップを結んでいます。

ボランティアの現場から次世代へメッセージ

講演のテーマは、「人道の危機に対する国際赤十字の取り組みとそこから見えてきた課題」。登壇したシィ事務総長は、多数の紛争や地球温暖化による気候変動などの問題で混迷し、支援を必要とする人が年間1億人を超える世界情勢についてレクチャー。かつてないほど平和、連帯、人道的行動が必要とされる世界において、“Do for Others”という精神こそが、未来への指針となると話しました。

そして、このモットーと赤十字運動の理念の共通点について触れ、世界190カ国で活動する1700万人もの赤十字ボランティアは、問題の大小に関わらず支援を要する地に入り救援し、その後も長くとどまって支え続けるという赤十字・赤新月社の支援の特徴を解説。連盟は“3つの悪魔のD”(Disaster[災害]、Displacement[居住地を追われること=避難民]、Disease[病])に直面していることを訴

学生たちからの真摯(しんし)な質問に耳を傾けるシィ事務総長。次世代を担う学生たちとの交流も行われ、有意義な会となりました

え、「3Dの原因はコントロールできません。だからこそ、誰もが明日には弱者になる可能性を認識し、他者に奉仕できる“特権”を持つ素晴らしさを知ってほしい」と語り掛けました。

その後行われたディスカッションでは、人道支援の考え方や学生ができることなど、学生たちから活発に寄せられた質問に、シィ事務総長は「人道支援において大切なのは、相手の尊厳と敬意を忘れないこと」「学生でも、救急法の受講や献血などはできる。近くの人々を助けたいければ、未来へつながるネットワークが構築できる」などと丁寧に回答。「国内外の支援活動



ボランティアの最前線から伝えられる世界の現状に聞き入る学生たち

のバランスをどう取るのか」という問いには、福島原発事故の例を挙げ、「日本からの要請なく連盟に10億ドル(約1100億円)の義援金が集まった。これは世界が日本に助けられてきたことを思い出した結果であり、国内の問題がグローバルな問題になって連帯を示した良い例」と、世界の連帯の重要さが強調されました。

参加者からは「自分にできることが明確になった」といった、事務総長の思いが次世代に伝わったことを感じさせる感想が聞かれました。学生たちの将来の活躍が期待されます。



赤十字活動に関心を寄せる多くの大学生、高校生が集まりました(左) 講演後も事務総長は質問や写真撮影に笑顔で応じ、学生たちとの活発な交流が続きました(右)



若者にこそ届けたい“たすけあい”の精神

グローバルフェスタでユースボランティア*が活躍



ブースでは、ルワンダで大人も子どもも楽しみながら学ぶアニメーション映画がどんなものかを動画で紹介

スボランティアの大学生たちが中心となり、12月に向けた取り組みの一環として、9月30日、10月1日に東京・お台場、シンボルプロムナード公園で行われた「グローバルフェスタ Japan2017」に出展。アフリカ・ルワンダで各地を巡回して保健衛生などを啓発する「モバイルシネマ(移動式映画館)」を動画で紹介しました。

この動画を制作したユースボランティアの田村理紗さんは、「人々が楽しむことを通じて知識を広める支援の工夫

を学んだ。また、日本では当たり前なのが当たり前ではない国があることを知り、私自身が驚いた世界の現状と支援の大切さを伝えたいと思った」と話しました。

メンバーたちは海外たすけあいの活動を「同世代の若い人たちに知ってほしい」と口をそろえ、活動の様子をInstagramでも発信しています。澤田美欧さんは「海外留学で日本の学生のボランティア活動への意識の低さを感じた。私たちが活動することで意識を高めたい」、

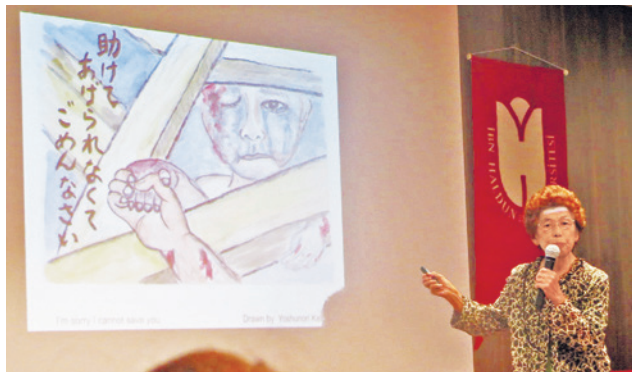
吉岡薫衣さんは「この活動を知った学生たちが、いつか募金を含むアクションを起こしてくれることを期待している」と、それぞれに熱く語りました。日赤ブースには、若者をはじめ親子連れなどたくさんの来場者が集まり、ユースたちの声に耳を傾けていました。



当日は学生ユースの他、社会人のオフィスボランティアも参加。共に協力し合い、ブースを盛り上げました

↑Instagramはこちら

*ここでのユースボランティアとは、「NHK 海外たすけあい」キャンペーンのために首都圏の奉仕団や大学から参加した学生たちのこと



被爆の当時の様子を描いた絵を用い、約1時間に及ぶ講演

「伝える」ことから始まる 核兵器廃絶の取り組み

広島市の被爆者がトルコ赤新月社の招聘で講演

9月13日、トルコのイブン・ハルドゥーン大学において、広島市の笠岡貞江さんが被爆体験を語る講演を行いました。この講演は、今年4月、核兵器廃絶について議論する国際赤十字・赤新月運動会議で被爆者の実体験を聞いたトルコ赤新月社副社長が「トルコの人にも知るべきことだ」と日赤に被爆者の招聘を要請し、実現したものです。

12歳の時に広島で被爆した笠岡さんはこの原爆で両親を亡くし、自らも被爆の影響とみられる症状や、被

爆者への差別に長く苦しみました。「犠牲になった方のために役立ちたい」という思いから、84歳を迎えた現在もそのつらい体験を広島平和記念資料館などで語り続けています。トルコ講演でも、多くの市民が犠牲となった悲惨な光景を伝え、核兵器の脅威、平和への思いを学生たちに届けました。

3日間の滞在期間には講演の他、マスコミ取材や記者会見も行われ、笠岡さんが証言する被爆の実情、悲惨さが多くの人に向けて発信されました。また、トルコ赤新月社が支援しているシリア難民のための施設も

訪問。難民の子どもや母親たちと交流し、「戦争や紛争の一番の被害者は女性や子ども、高齢者。同じ過ちは繰り返してはならない」と共感し合う場面も見られました。

トルコ訪問を終えた笠岡さんは、「原爆は二度と使ってほしくないのです。そのために、戦争や原爆の恐



シリア難民の子どもたちと折り紙で交流



講演の前に地元メディア5社からの取材に精力的に対応

ろしさ、それによって奪われた日常、悲しみを知ってほしいのです。日本の若者は戦争を知りません。資料館を訪れる海外の方も、原爆の恐怖を知らなかったと言います。世界の人に核について認識し考えてもらえるよう、『世界平和』という被爆者の願いをまだまだ伝えていきたいと思っています」と話しました。

核兵器廃絶に向けた笠岡さんの活動、そして赤十字・赤新月社の取り組みは続きます。

皇后陛下のおこころが伝わる 手拭いのお見舞い

62回目を迎えた「御下賜の手拭い」



「有難いですねえ！」松本園長から手拭いが渡されて満面の笑み

10月20日は、日本赤十字社の名誉総裁である皇后陛下のお誕生日です。毎年、この日に際して、日赤に600本の日本手拭いの御下賜があり、日赤の老人保健施設や特別養護老人ホームの入所者などに配られます。

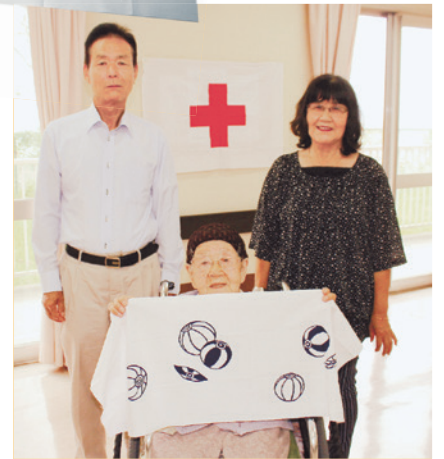
手拭いの御下賜は昭和24年に始まり、折り鶴、麦穂、紙風船と絵柄が変わりながら、今年で62回目

となります。

今年、手拭いが届いた特別養護老人ホーム「小川ひなた荘」(埼玉県)では、松本園長の手からお一人お一人に手拭いが配られました。受け取られた入所者からは「うれしくて、もったいなくて、使えません。大切に取っておきます」「皇后様のお写真の下に飾ろうと思う」と感激の声。手拭い配布の日にたまたま面会に来ていた田島志げさん(99)のご家族は「喜んでる母の姿を見られて良かった。白寿のお祝いになりました」と顔をほころばせました。



手拭いの柄は折り鶴、麦穂と変遷し3年前から紙風船に



「長生きして良かったね」と、田島志げさんとご家族

「とっさのとき、どうする？」は切り取って保存していただけます

file.6 とっさのとき、どうする？

切り傷の止血法

調理中や作業中に、鋭利なものでざっくりと皮膚を切ってしまった！よくあるけがですが、出血量が多い場合はすぐに止血しなくてはなりません。最も効果的な止血法を覚えておきましょう。流水で傷口を洗ってから右図を実践します。その際は以下のことに気を付けてください。

【切り傷の止血法：直接圧迫法】

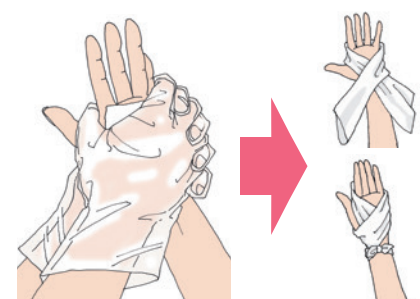
- ・救助者は、感染予防のため、負傷者の血液に触れないようビニール手袋を着用するか、ビニール袋の上から圧迫する
- ・保護ガーゼがなければタオルや清潔なハンカチなどで代用する。特に、アイロンを当てたハンカチは折

り畳んで空気に触れていない面の滅菌効果が持続しているので常備しておくとう便利。ただし、繊維が傷口に残って化膿の原因にもなるためティッシュペーパーは使わないこと

- ・血液でガーゼなどがぬれて止血効果が低下したら、別のガーゼなどを重ねて圧迫を続ける
 - ・医療機関を受診する際には、治療の妨げとなるため、薬品での消毒を避ける
- 切り傷でもう一つ注意が必要なのは「化膿」です。「赤くなっている」「腫れている」「ズキズキとした痛みがある」などの化膿症状があれば、すぐに医療機関を受診してください。

うっかり作ってしまった切り傷、なかなか出血が止まらない！

直接圧迫法



手で圧迫：出血部位に保護ガーゼなどを当てて、直に強く押さえて圧迫する

包帯で圧迫：手の圧迫で出血が治ったら、包帯を少しきつめに巻いて圧迫する

※詳細は赤十字救急法講習を受講ください。受講のお問い合わせは、日赤の各都道府県支部へ

AREA NEWS

日々の生活や未来を支援するために。
全国各地、あなたの生活のすぐそばで、
日本赤十字社の活動は行われています。

栃木県

若い世代に向けて発信 骨髄バンク推進全国大会開催

世界骨髄バンクドナーデーの9月16日、日赤が後援した日本骨髄バンクのイベント「骨髄バンク推進全国大会2017 in 栃木」が開かれ、骨髄移植事業に貢献した県内の4団体が表彰を受けました。大会では、骨髄提供の上限年齢を迎える俳優の木下ほうかさんが「骨髄提供はかけがえのない体験」と自らの経験を語り、次代を担う若者に向けてドナー登録を呼び掛けました。



骨髄提供経験者の木下ほうかさん。「患者さんからの手紙は宝物」

群馬県

災害時の連携や情報共有に貢献 ロールコール100回記念通信

群馬県無線赤十字奉仕団が定期的に行ってきた「ロールコール」が100回を数え、9月13日に記念通信が行われました。これは、災害時に使う周波数を定着させる目的で、複数の無線局が同じ周波数に合わせて通信する訓練です。

東日本大震災の際、団員はすぐに周波数を合わせて支部に集合。赤十字飛行隊とも連携して迅速な情報収集を行いました。



2009年に開始。東日本大震災を経て、さらに訓練を重ねてきました

大阪府

ボランティアの魅力を伝えたい！ 奉仕団のコラボレーションイベント

赤十字ボランティア活動を多くの人に知ってもらおうと、大阪府支部の奉仕団12団と防災ボランティアがイベントを企画・運営。10月1日、「赤十字ボランティア・フェスティバル」が開催されました。AED体験やビューティーケアの実演、炊き出しの疑似体験などを展開し、来場者からは「いろんなボランティアがあることを初めて知った」との声も寄せられました。



AEDの使い方をボランティアが丁寧に指導

山口県

献血の役割を知る機会に 「キッズ献血」で模擬体験

山口県赤十字血液センターは10月2日、山口市立湯田中学校で献血の模擬体験教室を開きました。将来の献血協力につなげたいと中学生を対象にした、県内では初の試みです。

保健委員の20人に対し血液や献血の役割を講義。授業を受け、模擬献血も体験した生徒の1人は、「説明を聞いて怖いイメージがなくなった」。学んだ知識は文化祭で発表されます。



初めての採血の模擬体験に緊張の表情

大分県

災害から命を守るために 中学校で防災講座を開催

9月28日、大分県支部は佐伯市立鶴見中学校の3年生を対象に、防災講座を実施しました。自身の生活圏内の地図から災害発生時の危険箇所を確認した生徒たちは、防災に関して活発に意見を交換。また、過去の災害被災者の手記による追体験で災害の全体像を捉えると、「災害時に地域に対して何ができるかを考えたい」と話すなど、意識の変化が見られました。



地域の地図を囲んで危険な場所を確認、備えについて考えました

「知って良かった！健康豆知識」は切り取って保存していただけます

日赤のドクター&ナースが教える
知って良かった！

健康豆知識



目・鼻・皮膚から侵入するハウスダストに注意!

長野赤十字病院 感染症内科部長/日本アレルギー学会専門医 増淵 雄(ますぶち たけし)
長野県長野市若里5-22-1 TEL 026-226-4131(代)

秋は、梅雨から夏にかけて増殖した「ダニ」のふんや死骸が原因となる「ハウスダストアレルギー」に注意が必要な季節。よくある症状としては、アレルギー性の鼻炎・結膜炎・喘息・アトピー性皮膚炎などが挙げられます。

アレルギーとは、体に備わっている「外敵から身を守る免疫システム」に何らかの異常が生じ、本来なら害のない物質にまで過剰に反応してしまう免疫系の疾患です。発症すると持病が悪化したり、喘息から肺炎を招いたりする恐れもあります。ハウスダストなどの原因物質(アレルゲン)は、目や口、鼻などの粘膜だけでなく、皮膚からも侵入することがわかっ

ています。そのため、皮膚のバリア機能が低下している高齢者は要注意。たとえ皮膚から入ったハウスダストでも、鼻炎や喘息など、皮膚以外のアレルギー症状を引き起こすこともあるのです。

ハウスダストアレルギーは一度発症すると根治の難しい病気なので「予防」が大切です。まずは、小まめな掃除と通気で生活空間を清潔に保ちましょう。また、ストレスは症状を悪化させる原因になりますので適度に発散することも大切。乾燥によって皮膚表面(角質)が荒れると肌内部に刺激が入りやすくなるので、保湿によって皮膚のバリア機能を高めるのも有効です。



乾いた咳(せき)が続く「咳喘息」、鼻水が喉に下りてくる「後鼻漏(こうびろう)」もハウスダストによるアレルギー症状です。気になる症状がある場合は、医療機関の診察を受けましょう

file. 40

石川県

観光都市金沢で初のAEDフィールドワーク

9月9日、石川県支部のユースボランティアなど14人が、金沢市の観光地における初のAEDフィールドワークを行いました。金沢駅や周辺のホテルのAED設置場所に加え、看板の有無や付属品の内容などまで詳しく調査。参加者は「観光客にもわかりやすいマップにしたい」などと構想を語りました。来年中にウェブ上で閲覧できるAEDマップを完成させる計画です。



広報部隊が今回の調査などユースの活動をレポートしFacebookで公開中

滋賀県

思いを受け継ぐ戴帽式 看護への使命感を新たに

10月4日、大津赤十字看護専門学校で戴帽式が行われ、1年生37人にナースキャップが授けられました。戴帽式は、厳しい看護職への道の第一関門として、改めて気持ちを高めるための式典です。戴帽を受けた学生たちは、ナイチンゲール像の前で上級生から看護の精神を誓うろうそくの明かりを受け継ぎ、「人道・博愛」の赤十字精神の下で学ぶ誇りと覚悟を新たにしていました。



「使命感を持って努力を積み重ねてほしい」と石川学校長

近畿ブロック

国際理解を深める国際交流事業 マレーシア赤新月メンバーが来日

近畿ブロックの日赤6支部(滋賀・京都・大阪・兵庫・奈良・和歌山)は、毎年合同で国際交流事業を行っています。今年はマレーシア赤新月社から15人が来日。青少年赤十字(JRC)加盟校での交流や、日本の家庭にホームステイする日本文化体験などを提供しました。9月16日～18日には和歌山県で国際交流集会も開催。6府県のJRCメンバーやスタッフ59人が参加し、親睦を深めました。



台風により高野山でのプログラムを屋内に変更するも若いパワーで大成功

北海道

静岡県

大分県

災害時機能する救護活動を目指して、多様な災害に備え各地で訓練を実施

9月21日、大分空港で行われた「乱気流による航空機の揺れで傷病者が発生」という想定した航空機事故対処訓練に、大分県支部の救護班が参加。消防や関連機関と協働しての負傷者の安定化や、後方医療機関への搬送を訓練しました。

静岡県支部と引佐赤十字病院は、9月24日に合同災害救護訓練を行いました。巨大地震に伴う複合的な大災害を想定し、救護の連動を確認。奉仕団やボランティアも参加し、通信や炊き出しなど、災害時機能を総合的に検証しました。

9月30日には北海道の伊達赤十字病院が有珠山の噴火と大地震を想定した訓練を実施。今回は特にトリアージで「救命不可能」と判断された傷病者や、外国人傷病者への対応も行われ、参加者は「実態に即した有意義な訓練だった」と話しました。



噴火

一刻一秒を争う訓練の中、消防隊員も、そこに存在しない「神の声」としてアドバイス(北海道)



航空機事故

救護所へ搬送された傷病者の対応をする医師(大分県)



大地震

消防署の協力を得て重傷者を後方搬送(静岡県)

常任理事会開催報告

平成29年10月17日、本社において平成29年度第6回の常任理事会が開催されました。

今回の常任理事会は、付議事項はありませんでしたが、日本赤十字社救護規則の改正の概要、支援病院の平成29年度第1四半期経営状況にかかる補足説明、バングラデシュ南部避難民への日本赤十字社の対応および予算の補正にかかる9月分の社長専決事項の決定状況について、それぞれ報告しました。

present プレゼント

ハートラちゃん
メモパッド
&ボールペン

非売品



セットで3名様 にプレゼント!

希望者は、以下の項目を明記のうえ、郵送・FAX・メールでご応募ください。

- ①お名前(匿名をご希望の方は、その旨もご記入ください)
- ②郵便番号・ご住所 ③電話番号 ④年齢
- ⑤赤十字NEWS11月号を手にした場所(例/献血ルーム)
- ⑥11月号で良かった記事、興味深かった記事はどれですか?(いくつでも)
A.表紙 B.カメラがとらえたまなざし
C.連盟理事長特別講演
D.若者にこそ届けたい「たすけあい」の精神
E.核廃絶への取り組み F.御下賜の手拭い
G.とっさのとき、どうする? H.エリアニュース
I.健康豆知識 J.ワールドニュース
K.人道支援の現場から
- ⑦赤十字NEWSのご感想、扱ってほしいテーマ、その他Voice(読者の声)への投稿もお待ちしております。

郵送/〒105-8521

東京都港区芝大門1-1-3 日本赤十字社
広報室 赤十字NEWS11月号プレゼント係
FAX / 03-6679-0785 メール/ koho@jrc.or.jp
(件名「赤十字NEWS11月号プレゼント係」)
11月27日(月)必着

※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます
※個人情報(読者の声)は賞品の発送のみに使用いたします

バングラデシュ南部避難民 救援金受け付け中

避難民を取り巻く状況が深刻化する中、日赤では引き続き下記のとおり救援金の受け付けを行っています。ご寄付いただいた救援金は、日赤による保健医療支援に加え、避難されている方々の食料や生活必需品の確保、安全な水や衛生などの緊急ニーズに応えると共に、こころのケアや離散家族支援などに充てられます。皆さまの温かいご支援をよろしくお願いいたします。

- 救援金名称: バングラデシュ南部避難民救援金
- 受付期間: 平成30年3月31日(土)まで
- 協力方法

(1) 郵便振替によるご協力(ゆうちょ銀行・郵便局)

口座番号 00110-2-5606
口座名義 日本赤十字社(ニホンセキジュウジヤ)
※通信欄に「バングラデシュ南部避難民」と明記してください
※窓口でのお振り込みの場合は、振込手数料が免除されます
(ATMによる通常振込みおよびゆうちょダイレクトをご利用の場合は、所定の振込手数料がかかります)

(2) 銀行振込によるご協力

①三井住友銀行 すずらん支店 普通 2787769
②三菱東京UFJ銀行 やまびこ支店 普通 2105774
③みずほ銀行 クヌギ支店 普通 0623404
※口座名義はいずれも「日本赤十字社」 ※ご利用の金融機関によっては、振込手数料が別途かかる場合があります

(3) クレジットカード・コンビニエンスストア・Pay-easyによるご協力

詳細は日赤のサイトをご覧ください。

日本赤十字社 救援金 バングラデシュ南部避難民

検索



<http://www.jrc.or.jp/contribute/help/cat817/index.html>



WORLD NEWS

ラオス血液事業の歩み



現地職員の検査手順を確認する日赤の技術要員(第二次支援)



献血をする僧侶

年間献血者、5人から3万6408人へ! “献血”という概念のない国での成功

日本赤十字社は1995年から今年3月まで約20年間、無償献血*による安全な血液の確保を目指すラオス赤十字社の血液事業を支援してきました。実は、約半世紀前までは日本でも売血による血液が輸血に使われていました。しかし、献血の推進が閣議決定されてからは、国民の協力や関係者の努力などにより、献血で確保された安全な血液を安定的に供給する体制が確立されました。かつての日本と同じ道を歩むラオスを支援した歴史を振り返ります。

「献血は怖い」という人々へ 血液事業のノウハウを伝える

1990年代初頭のラオスでは、輸血に必要な血液は売血や家族からの提供によって集められていました。当時は献血という概念が普及していなかったため過度に怖がる人が多く、首都ビエンチャンにある血液センターに献血に訪れる人は年間わずか5人ほど。感染症などの検査も不十分で、安全面にも問題を抱えていました。

こうした状況を改善するため、1995年、ラオス



学校などで行われた出張献血の様子(第一次支援)

*自発的かつ金銭などの対価を伴わない血液の提供

赤十字社への第一次支援を開始。血液センターの新築、資機材提供などの物的支援の他、全国の赤十字血液センターで中核を担っていた専門家を現地に半年間派遣し、献血の普及活動、検査技術の指導などを実施しました。献血の会場で、時間をかけてその必要性や安全性を説明するなど、「献血は怖い」というラオスの人々の意識を変える活動にも尽力した結果、ラオス全域で献血率(輸血に使用する血液の中で、無償献血由来の血液が占める割合)が向上し、2003年には首都ビエンチャンで100%を達成するに至りました。

安全な血液を必要とする全ての人へ 血液事業支援の歩みは続く

2012年に始まった第二次支援では、血液製剤の品質向上を重点項目とし、採血から供給までの手順書の作成、ラオス各地の血液センター職員への研修などを実施。その結果、作業手順が標準化され、安全で品質の保証された血液製剤をラオス全域に供給できる仕組

みが整えられました。

日赤は、日本の技術を伝えるため、これまでに22カ国の赤十字社・赤新月社から425人の研修生を受け入れており、うちラオスからは22人が来日。支援開始の当初からラオス赤十字中央血液センターで働き始め、1998年度に研修生として学んだ経験があるチャンタラ所長は、「日赤の支援がなければ、今日のラオスの血液事業は始まらなかったでしょう。確かな経験に裏付けられた技術的助言は、我々の活動の全てに役立っています」と語ります。

約20年間にわたり行われたラオス赤十字社への支援は2017年3月に終了しましたが、長年の支援に対して、同年9月には東京のラオス大使館で、同国政府を代表して駐日ラオス大使のヴィロード・スンダーラー閣下から、近衛忠輝社長に感謝メダルが贈られました。今後も「無償献血による安全な血液を必要とする全ての人へ届ける」という共通の使命に向かって、両国の赤十字は共に歩んでいきます。



駐日ラオス大使(右)から、日赤社長に感謝メダルを授与

VOL.14 人道支援の現場から

ケニアの空の下、「自国で活動資金確保」を支える

私はアフリカ地域の赤十字社を支援するための関係構築や財源確保の業務に携わっています。アフリカには紛争や災害、感染症など深刻な問題が山積し、多くの支援要請が届きます。

そんな中、新たにアフリカ開発銀行や日本政府に向けた大規模な資金協力の申請に踏み出しました。必要とされる膨大な資料の作成に苦労しましたが、資金不足に悩む各国にいる連盟からの派遣員にも大いに喜んでもらうことができました。今回、開拓した資金獲得が実現すれば、紛争の救援活動や防災・減災の効果は計り知れ

ません。

自国で一定の財源を調達可能にすることは社の存続に不可欠です。最近ナイロビを訪問したジンバブエ赤十字社の財政部長は、同社が行う救急法の有料講習、診療活動、病院での食事の提供などを通じ、2億円を超える活動資金が自国で調達可能になったと、非常にうれしそうに語り、その笑顔が大変印象的でした。

空港から市内へ向かう車窓に広がるケニアの草原を眺め、緊張を新たに着任してから5カ月。1年後、空港への風景はどう映るでしょうか。



永積 健太郎

Kentaro Nagazumi

連盟アフリカ地域事務局
パートナーシップ推進部長(ケニア)
(日赤本社人事部付)